

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

（主人公の小川三四郎は、九州福岡県の出身で熊本第五高等学校を卒業して上京し、東京帝国大学に入学したばかりの新生である。）

昼飯を食いに下宿へ帰ろうと思ったら、昨日ポンチ画を
かいた男が来て、おいおいと言いながら、本郷の通りの淀
見軒という所に引つ張って行って、ライスカレーを食わし
た。淀見軒という所は店で果物を売っている。新しい普請
であった。ポンチ画をかいた男はこの建築の表を指して、
これがヌーボー式だと教えた。三四郎は建築にもヌーボー
式があるものと初めて悟った。帰り路に青木堂も教わっ
た。やはり大学生のよく行く所だそうである。赤門を
入って、二人で池の周囲を散歩した。その時ポンチ画の男
は、死んだ小泉八雲先生は教員控室へ入るのが嫌で講義が
済むといつでもこの周囲をぐるぐる回ってあるいたんだと、
あたかも小泉先生に教わったような事を言った。①なげ
控室へ入らなかつたのだろうかと三四郎が尋ねたら、

問二

傍線部①について、小泉八雲が「控室へ入らなかつた」ことを与次郎はどのように思っていたか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 英語圏に育った小泉八雲先生は、英会話の苦手な日本人と流暢に対話が出来なかつたのだろう
- 2 内気な性格の小泉八雲先生は、日本人教員と気軽に話して打ち解けるのが苦手だつたのだろう
- 3 かねて欧米を知る小泉八雲先生には、近代化以前の日本人から学ぶものなどなかつたのだろう
- 4 静かな思索と学問を愛する小泉八雲先生は、知的好奇心を喚起されない場所を嫌つたのだろう

「そりゃ当り前ださ。第一彼らの講義を聞いても解るじゃないか。話せるものは一人もいやしない」と手ひどい事を平気で言ったには三四郎も驚いた。この男は佐々木与次郎といつて、専門学校を卒業して、今年また選科へ入つたのだそうだ。東片町の五番地の広田といううちに居るから、遊びに來いと言う。下宿かと聞くと、なに高等学校の先生の家だと答えた。

それから当分の間三四郎は毎日学校へ通つて、^aリチギに講義を聞いた。必修科目以外のものへも時々出席してみた。それでも、まだ物足りない。そこで遂には専攻科目にまるでエンゴのないもの迄へも折々は顔を出した。しかし大抵は二度か三度で止めてしまった。一ヶ月と続いたのは少しも無かつた。それでも平均一週に約四十時間ほどになる。いかな勤勉な三四郎にも四十時間はちと多過ぎる。三四郎は絶えず一種のアツ^cパクを感じていた。しかるに^②物足りない。三四郎は楽しまなくなつた。

問一

傍線部 a～e の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

a 1 キリツと礼の号令 2 ホウリツの制定

3 成功するカクリツ 4 恐怖でリツゼンとする

b 1 車のコシヨウ 2 コダイ史の研究

3 コジン主義 4 液体とコタイ

c 1 ハクギンの世界 2 夜明けのハクメイ

3 ミヤクハク 4 ハクシンの演技

問三

傍線部②の「物足りない」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 故郷を離れて華やかな大都会へ来たのにその解放感や楽しさが何も感じられないこと
- 2 最高学府に入学した誇りや喜びを沸き立たせるような講義の充足感が得られないこと
- 3 大学の高尚な講義にアツパクされるばかりで心浮き立つ愉快的な行事に出会えないこと
- 4 実際の帝国大学が自分の想像したイメージと大きく違って惨めな学生生活であること

ある日佐々木与次郎に逢ってその話をすると、与次郎は四十時間と聞いて、目を丸くして、「馬鹿馬鹿」と言ったが、「下宿屋のまずい飯を一日に十返食ったら物足りる様になるか考えて見ろ」といきなり^③警句でもって三四郎をどやしつけた。三四郎はすぐさま恐れ入って、「どうしたらよからう」と相談をかけた。

^④「電車に乗るがいい」と与次郎が言った。三四郎は何か寓意でもある事と思つて、しばらく考えてみたが、別にこれという^dシアンも浮かばないので、

「本当の電車か」と聞き直した。その時与次郎はげらげら笑つて、

「電車に乗つて、東京を十五六返乗り回しているうちには自ずから物足りるようになるさ」と言う。

「なぜ」

「なぜつて、そう、生きてる頭を、死んだ講義で封じ込めちゃ、助からない。外へ出て風を入れるさ。その上に物足りる工夫はいくらでもあるが、まあ電車が一番のシヨ。

ホでかつ最も軽便だ」

問四

傍線部③の「警句」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 大学の講義も下宿屋の飯も、過度にとると逆に心身を害することになるという意味
- 2 硬直した講義を幾ら聴いても下宿屋の飯と同様に真の満足感は得られぬという意味
- 3 悪貨は良貨を駆逐するの譬えもあるが、悪貨に染まらぬよう注意すべきという意味
- 4 手短なまがいにものに慣れ親しんでいると、本物の良さを忘却してしまうという意味

問五

傍線部④はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ

- 1 電車に乗って、大学だけでなくそれを取り巻く活きた現実世界を広く見る必要があるということ
- 2 電車に乗って外の空気を吸い、窓外の風景を眺めれば心の内の鬱々した気分も晴れるということ
- 3 故郷や熊本にない電車のスピードや便利さを体験し、大都会の開明ぶりを知るべきだということ
- 4 文明の利器である電車に実際に乗ってみることで、現下の日本の近代化を体感できるということ

問一

傍線部 a、e の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

d 1 芸術シジヨウ主義 2 シジヨウを差し挟む

3 チンシ黙考 4 シコウ錯誤

e 1 陸軍のホヘイ部隊 2 動物をホカクする

3 安全ホシヨウ条約 4 金色のイナホが揺れる

その日の夕方、与次郎は三四郎を拉して、四丁目から電車に乗って、新橋へ行って、新橋からまた引き返して、日本橋へ来て、そこで下りて、

「どうだ」と聞いた。

次に大通りから細い横町へ曲がって、平の家という看板のある料理屋へ上がって、晩飯を食って酒を呑んだ。その下女はみんな京都弁を使う。はなはだ纏綿している。表へ出た与次郎は赤い顔をして、また

「どうだ」と聞いた。

次に本場の寄席へ連れて行ってやると言って、また細い横町へ入って、木原店という寄席へ上がった。ここで小さんという落語家を聞いた。十時過ぎ通りへ出た与次郎は、また

「どうだ」と聞いた。

三四郎は物足りたとは答えなかった。しかしまんざら物足りない心持ちもなかった。すると与次郎は大いに小さん論を始めた。

小さんは天才である。あんな芸術家は滅多に出るものじゃない。いつでも聞けると思うから安っぽい感じがして、甚だ気の毒だ。実は^⑤彼と時を同じうして生きている我々は大変な幸せである。今から少し前に生まれても小さんは聞けない。少し後れても同様だ。——円遊もうまい。しかし小さんとは興きが違っている。円遊の扮した太鼓持は、太鼓持になった円遊だから面白いので、小さんのやる太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だから面白い。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう。小さんの演ずる人物から、いくら 11、人物は活発発地に躍動するばかりだ。そこがえらい。

与次郎はこんな事を言って、また

「どうだ」と聞いた。実をいうと三四郎には小さんの味わいがよく分からなかった。その上円遊なるものは未だかつて聞いた事がない。従って与次郎の説の 12。しかしその比較のほとんど文学的と言い得る程に要領を得たには感服した。

問六

傍線部⑤はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 小さんは最高の落語家で、その名人と時代を共にしたことは後世に自慢できる誇りだから
- 2 小さんの落語を聞けば、話の中の人物たちとも実際に出会えたような幸福を味わえるから
- 3 卓越した技量をもつ名人の生身の芸との出会いは、現場にいた者だけが得られる特権だから
- 4 百年に一人の天才など滅多に誕生しないが、その機会に出会えるのは幸運でしかないから

問七

空欄11に入る言葉として最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 太鼓持を伏せたって
- 2 職業を偽ったって
- 3 小さんを押し出したって
- 4 小さんを隠したって

問八

空欄12に入れるものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 善悪は不明である
- 2 信憑性は疑わしい
- 3 成否は未定である
- 4 当否は判定しにくい

高等学校の前で別れる時、三四郎は、

「ありがとう、大いに物足りた」と礼を述べた。すると与次郎は、

「⑥これから先は図書館でなくっちゃ物足りない」と言って片町の方へ曲がってしまった。この一言で三四郎は初めて図書館に入ることを知った。

(夏目漱石『三四郎』による)

※ポンチ画……風刺や寓意を主とした漫画で、イギリスの雑誌

名punchの挿絵にちなむ

※ヌーボー式……二〇世紀初め、フランスで流行した美術の一

様式

※小泉八雲……出生名はP. ラフカディオ・ハーン。英国領ギリシ

ア(レフカダ島)の出身、新聞記者・紀行文作家・作家・日本研究

家、東京帝国大学では英文科講師で漱石の前任者だった

※纏綿……情緒が深く、こまやかで離れにくいさま

※小さん……柳家小さん。本名は、豊島銀之助

※円遊……三遊亭円遊。本名は、竹内金太郎

※『三四郎』……明治年9月～2月にかけて朝日新聞に発表され

た連載小説

問九

傍線部⑥はどのような意味か。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 東京暮らしの外の空気を紹介してあげたから、このあとは大学内の図書館をめぐって多くの書物があるのを確かめるだけだということ
- 2 東京暮らしを実感したあとは、良質な書物とじっくり向き合ってみずから思考力を高めないと充実した学生生活は送れないということ
- 3 エリート研究者をめざすからには何よりも図書館に籠って多くの書物を読み、広汎かつ深い知識を蓄える必要があるということ
- 4 日本一の東京帝国大学を象徴するのは万巻の書物を所蔵する図書館だから、まずはそこを見学しておかないと話にならないということ

問十

本文中の与次郎はどのような存在と考えられるか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 地方出身の三四郎ばかりか小説の読者に対しても東京の学生生活をユーモラスに紹介する水先案内人
- 2 三四郎の朴納さを見下ろし、東京の町を案内しながらも彼を煙に巻いて楽しんでいる少し嫌みな先輩
- 3 東京帝国大学の旧弊な権威主義に反感を抱き、その転覆計画に三四郎をも巻き込もうと考える野心家
- 4 大学の本科生でなく選科生であるコンプレックスを隠して本科生の三四郎を翻弄しようとする皮肉屋

問十一

小泉八雲の代表作として最も適切なものを次の中から選
び、その番号をマークせよ。

- 1 武士道
- 2 明暗
- 3 怪談
- 4 高野聖

「二次の文章を読んで、後の問いに答えよ。」

大和の国添^{そふのかみのこほし}上群^{じやうぐん}の山村の中^{やまのむら}の里に、昔^{むかし}棕^{くわうりゆう}の家長^{いへんぢやう}の公^{きみ}といふひと有りき。十二月に当りて、方広^{ほうくわう}経^{きやう}に依りて先^{まづ}の罪^{つみ}を懺^くむとねがひき。使人^{つかひびと}に告げて曰く、「①一はしらの禅師^{ぜんじ}を請^うくべし」といふ。その使人^{つかひびと}問ひて曰く、「②何等^{なんとう}の師^しぞ」といふ。答へて曰く、「その寺^{てら}を扱^あばず。遇^あふに随^まひて請^うけよ」といふ。その使願^{つかひがひ}に随^まひて路^ち行く一はしらの僧^{そう}を請^うけ得^えて家^{いへ}に歸^{かへ}りき。家主^{かぢしゆ}心を住^{すま}めて^ア供養^{くわうやう}す。

問一

傍線部①の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 僧侶を一人お迎えして来い
- 2 立派な僧侶一人を探すべきだ
- 3 みすぼらしい僧侶が一人いればよい
- 4 一人前の僧侶であるべきだ

問二

傍線部②の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 どれくらい偉いお坊さんにしましょうか
- 2 どのお寺のお坊さんがよいでしょうか
- 3 いつお坊さんをお迎えしましょうか
- 4 どなたの師となるべきお坊さんでしょうか

問三

波線部ア～エの動作の主体の中から異なるものを一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 供養す
- 2 イ 設けよ
- 3 ウ 却かしめよ
- 4 エ 修めき

その夜、礼経れいけい已ひに訖おはりて、僧の息いきはんとする時に、檀主だんしゅ設けて、被ふすを以て覆おほふ。僧即ち心に思はく、「明日物を得むよりは、被を取りて出づるに如かじ」とおもふ。時に声有りて曰く、「その被を盗ることなかれ」といふ。僧大きに驚き疑ひて、顧みて家中いへなかを窺ひ人をもとむるに、唯し牛一かしらのみ有りて、家の倉の下に立てり。僧牛の辺りに進むに、語りて曰く、「吾はこの家の家長の父なり。しかるに吾先の世に、人に与へむと思ひしが為に、子に告げずして稲を十束取りき。所以そゑに今、牛の身を受けて先の債はたりを償つくふ。汝はこれ出家なり。③何ぞ輒たやすく被を盗む。④その事の虚実を思はば、我が為人の座をい設けよ。我当おんに上り居らむ。まさにその父と知るべし」といふ。

問四

傍線部③の現代語訳として、最も適切なものを次の中から
選び、その番号をマークせよ。

- 1 何がよくてそのような布団を盗もうとするのか
- 2 どのような手段でその布団を盗んで持ち出すのか
- 3 なぜ平気でその布団を盗もうなどとするのか
- 4 どうして布団を盗むのが簡単だと言えるのか

問五

傍線部④の意味内容として、最も適切なものを次の中から
選び、その番号をマークせよ。

1 牛が僧の心を読むのはかつて盗みをしたからだという

こと

2 牛が言葉を話すのは人間の生まれ変わりだからとい

うこと

3 牛がこの家の先代の生まれ変わりであること

4 牛に生まれ変わったのは稲を刈り取ったからであるこ

と

問三

波線部ア～エの動作の主体の中から異なるものを一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア供養す
- 2 イ設けよ
- 3 ウ却かしめよ
- 4 エ修めき

ここに僧即ち大きに愧ぢ、還へりて宿処にとどまる。朝の事
行すでに訖りて曰く、「他人をして遠く却かしめよ」とい
ふ。然して後に親族を召し集へて、つぶさに先の事を陳べき。
檀越即ち悲しびの心を起こして、牛の辺に就きて藁を敷きて
申して曰く、「まことに吾が父ならば、この座に就け」とい
ふ。牛膝を屈めて座上に臥せり。

問三

波線部ア～エの動作の主体の中から異なるものを一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 供養す
- 2 イ 設けよ
- 3 ウ 却かしめよ
- 4 エ 修めき

諸の親^{うかひ}声を出して大きに啼^な泣きて曰く、「まことに吾が父なりけり」といふ。すなはち起ちて礼拝して、牛に申して曰く、「^⑤先の時に用ゐし所は、今はみな許し奉らむ」といふ。牛聞きて涙を流して大息す。^⑥即日^{そのひ}申の時に命終^{みづじゆう}せり。然る後に、覆ひし被と財物とを以て、その師に施し、さらにその父の為に広く功德を^⑦修めき。因果の理、^⑧豈まことならずあらむや。

(『日本靈異記』 による)

※方広経……大乘経典

※檀主……僧に布施をする主人

※被……掛け布団

※檀越……檀主に同じ

問六

傍線部⑤の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 家長が父を牛として使役したこと
- 2 家長が牛となった父を信じず試したこと
- 3 僧が被を盗もうと思ったこと
- 4 父が前世で稲を盗み人に与えたこと

問七

傍線部⑥はどのようなことを表しているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ずっと気になっていた稲のことを告白して息子に懺悔し、
 し、気概がくじけて生命力を失ったこと
- 2 息子が父の生まれ変わりの牛と知らずに使役し、息子の罪を和らげるために命を絶ったこと
- 3 先の世の罪を親族皆の前で告白し、家長としての恥を
 すすぐために自ら命を終えたこと
- 4 世の罪が許され、牛である償いも終わったことで安心して次の生に旅立ったこと

問三

波線部ア～エの動作の主体の中から異なるものを一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ア 供養す
- 2 イ 設けよ
- 3 ウ 却かしめよ
- 4 エ 修めき

問八

傍線部⑦の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 どうして本当でないということがあるのか
- 2 本当に何も信じられないということではいけない
- 3 決して本当のことではないというわけではない
- 4 たとえ信じられなくても本当のことはあるものだ

問九

この文章で言われているのはどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 親はたとえ亡くなった後でも大切に思わなければならぬということ
- 2 盗みをしたことで牛に生まれ変わるという懲罰が本当にあるということ
- 3 生まれ変わりを信じるも信じないも、その人の信心によらぬということ
- 4 師とされる僧であっても牛に説諭されて改心することがあるということ

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

大和の国添上群の山村の中の里に、昔椋の家長の公といふひと有りき。十二月に当りて、方広経に依りて先の罪を懺いむとねがひき。使人に告げて曰く、「一はしらの禅師を請くべし」といふ。その使人問ひて曰く、「何等の師ぞ」といふ。答へて曰く、「その寺を扱はず。遇ふに随ひて請けよ」といふ。その使願に随ひて路行く一はしらの僧を請け得て家に帰りき。家主心を住めて供養す。その夜、礼経已に訖りて、僧の息はんとする時に、檀主設けて、被を以て覆ふ。僧即ち心に思はく、「明日物を得むよりは、被を取りて出づるに如かじ」とおもふ。時に声有りて曰く、「その被を盗ることなかれ」といふ。僧大きに驚き疑ひて、顧みて家中を窺ひ人をもとむるに、唯し牛一かしらのみ有りて、家の倉の下に立てり。僧牛の辺りに進むに、語りて曰く、「吾はこの家の家長の父なり。しかるに吾先の世に、人に与へむと思ひしが為に、子に告げずして稲を十束取りき。所以に今、牛の身を受けて先の債を償ふ。汝はこれ出家なり。何ぞ輒く被を盗む。その事の虚実を思はば、我が為に人の座を設けよ。我当に上り居らむ。まさにその父と知るべし」といふ。

ここに僧即ち大きに塊ぢ、還へりて宿処にとどまる。朝の事行すでに訖りて曰く、「他人をして遠く却かしめよ」といふ。然して後に親族を召し集へて、つぶさに先の事を陳べき。檀越即ち悲しびの心を起して、牛の辺に就きて藁を敷きて申して曰く、「まことに吾が父ならば、この座に就け」といふ。牛膝を屈めて座上に臥せり。諸の親声を出して大きに啼泣きて曰く、「まことに吾が父なりけり」といふ。すなはち起ちて礼拝して、牛に申して曰く、「先の時に用ゐし所は、今はみな許し奉らむ」といふ。牛聞きて涙を流して大息す。即日申の時に命終せり。然る後に、覆ひし被と財物とを以て、その師に施し、さらにその父の為に広く功德を修めき。因果の理、豈まことならずあらむや。

『日本霊異記』による

※方広経……大乘經典

※檀主……僧に布施をする主人

※被……掛け布団

※檀越……檀主に同じ

「三次」の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「リンゴ」でも「これは美しい」でも、当たり前ですが、言語は自分自身ではない。^①言語は他者です。そして言語は、周りの他者(これは「他人」の意味)からインストールされたものです。他者が言葉をどう使うかを真似ることで、言語習得をしたわけです。

言語は、自分が生まれる以前からの「用法」を真似するという形でインストールされた。同様に、すべての他者もまた、他者による用法を真似して、言語を使えるようになってる。

そういう言語習得の過程で私たちは、他者から、ものの考え方の基本的な方向づけを受けてしまいます。たとえば、何を「美しい」と言うのか、何が「遊び」であり何がそうでないのか……育った環境によって、用法「意味の範囲が異なりますね。大げさに思うかもしれませんが、言葉のニュアンスの違いには、何か偏った価値観(イデオロギー)が含まれていると捉えるべきです。

問一

傍線部①とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 言葉は他者から学ぶものだということ
- 2 言葉はものとして自分とは異なるということ
- 3 言葉は現実とは別の次元にあるものだということ
- 4 言葉は自分が生まれる前からあるということ

すなわち、言語は、環境の「こころするもんだ」＝コードのなかで、意味を与えられるのです。だから、言語習得とは、環境のコードを刷り込まれることなのです。言語習得と同時に、特定の環境でのノリを強いられることになっている。

言葉の意味は、環境のコードのなかにある。

言葉は、実際に使われて初めて意味をもつ。本書は、こうした言語観を前提にして話を進めます。これは、ワイトゲンシュタインという哲学者の考えにもとづいています。

② 国語辞典に載っているのは、言葉の「本当の意味」ではありません。 載っているのは、代表的な用法です。辞典とは、人々が言葉をどう使ってきたのかの「歴史書」なのです。

言語習得とは、ある環境において、ものをどう考えるかの根っこのレベルで「洗脳」を受けようようなことなのです。これはひじょうに根深い。言葉ひとつのレベルでイデオロギーを刷り込まれている、これを自覚するのはなかなか難しいでしょう。

問二

傍線部②について、筆者は「国語辞典」の「言葉」をどのようなものと考えているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ

- 1 語源に基づく言葉の原義など存在しないということ
- 2 言葉の意味もまた言葉で記述されているということ
- 3 言葉の用法は歴史的に変遷してきたということ
- 4 別の辞典には言葉の別の意味が載っているということ

だから、「こう言わねばならない。

③言語を通して、私たちは、他者に乗っ取られている。

それにしても、言語とは、不思議な存在です——。言語は、物質的なモノのように触れることはできない、でも、独特のあり方で存在していて、強力に人生を左右するものです。

この「言語の存在」とは何なのかを考えてみましょう。

スケールのデカイ話になりますが、④人間にとって「世界」は、二重になっている。

普通に考えて、リアルに存在するのは、モノ⇨物質の世界です。物質的な現実です(ここからは、「物質的」な現実を、たんに「現実」と言うことにします)。

そこに、もうひとつの次元として、言語の世界が重なっている。

「リンゴ」のように、普通に使う言葉は、現実根ざしている。「リンゴ」は、現実のあの赤くて甘酸っぱい、手のひら大の果物を指す名前である。私たちは、言語と現実を結びつけて思考し、行為する。

問三

傍線部③であるのはなぜか。その理由にあてはまらないものを、次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 言語習得とは他者とのコミュニケーションを目的としたものだから
- 2 言語習得とは環境のコードを刷り込まれることだから
- 3 言語習得とは他者による言語の用法の真似だから
- 4 言語習得とは自分ではないものを自らの中にインストールすることだから

問四

傍線部④における「二重」の「世界」の説明として最も

適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 「モノ」物質」の世界と人間の世界
- 2 現実に根ざしている言葉とそれに縛られない言葉
- 3 他者に乗っ取られた言葉と自由に扱える言葉
- 4 モノに基づく現実と言葉によって付与された世界

しかし言語には、現実には縛られない独自の自由もあります。たとえば、テーブルの上にリンゴがあっても、たんに言葉として、「リンゴは箱のなかにある」と、非現実的なことを言うこともできる。^⑤「ここにはクジラがいる」と言うことさえできる。

何でも「言えるには言える」わけです。

言語はそれだけで架空の世界をつくれる。だから、小説や詩を書くことができる。先ほどの「リンゴ」は現実に根ざした普通の言葉ですが、何を指すのでもないたんなる言葉をつくることもできる——「リゴンゴン」とか。さらには、論理的にありえないことまで「言えて」しまう——「リンゴはクジラだ」とか、「丸い四角形」とか。

問五

傍線部⑤である条件は何か。その内容として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ

- 1 「リンゴ」という言葉がリンゴというモノを指す必然性はないこと
- 2 テーブルの上のリンゴを見ていない他者に対しては容易に嘘をつけること
- 3 「リンゴ」を「クジラ」と表現するのも表現の自由だということ
- 4 言語は「リンゴ」を「クジラ」と見立てた想像の世界を作り上げること

「こつした言語の自由さ」に、あらためて驚いてほしいのです。

言語能力は、現実的に行為しながら身につけていきますが、言語それ自体は、行為から切り離して使うことができる。要は、「言葉遊び」ができるということなのです。

言葉遊びは、6 から、できるのです。

このことに十分注意を向けてください。言葉は、レゴ・ブロックで何かをつくるように、どうにでも、遊びで組み合わせることができる。

言語それ自体は、現実から分離している。

言語それ自体は、現実的に何をするかに関係ない、「他の」世界に属している。

「このことを」、「言語の他者性」と呼ぶことにしたい。すなわち言語とは、「現実まるごとに対する他者」なのです。あるいは、リアルなモノに対し、言語は「ヴァーチャル」な存在であると言ってもいいでしょう。ヴァーチャルな存在としての言語が、現実まるごとに対する他者として、現実から分離しているのです。

言語の他者性(言語は現実から分離している)のために、現実と言語の「唯一正しい」対応関係はないということになる。だから、環境によって言葉の意味が変わるのです。

問六

空欄⑥に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 人間にとって世界は二重になっている
- 2 言葉を一つ一つ積み重ねることで意味が構築される
- 3 言葉がリアルでかつヴァーチャルな存在だ
- 4 言葉を「それ自体」として取り扱う

問七

傍線部⑥はどのような事態について述べているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 言語は現実から分離しているので、人間は言語によって現実と関係することはできないという事態
- 2 言語と現実との関係は恣意的なので、言語と現実の対応関係は絶対的ではないという事態
- 3 言語は自分自身ではないので、常に自分の現実からはかけ離れているという事態
- 4 言語習得はある環境のコードの刷り込みだが、環境が変わればそれから逃れられるという事態

そして、これがひじょうに重要ですが、まさしく同じ原理¹¹言語の他者性(言語は現実から分離している)によって、言葉のある環境での偏った意味づけは必然的ではなく、いつでもバラスることができる、別の意味づけの可能性がつねに開かれている、ということになります。

いいでしょうか。つまり、言語の他者性は、環境による洗脳と、環境からの脱洗脳の、両方の原理になっている。ここが核心なんです。ここに狙いを定めるのです

さらに話を深めたい。私たち人間は、(物質的)現実そのままを生きてはいません。言語というフィルターをつねに通している。というか、「言語によって構築された現実」を生きている。あるいは、次のように言い換えられるでしょう。

⑦ 人間は「言語的なヴァーチャル・リアリティ(VR)」を生き
ている。

最近話題になっていますが、VRとは「仮想現実」で、コンピュータによってつくられた映像と音の世界を生々しく体験させる技術です。ヘッドセットをつけて、三六〇度ぐるっとCGに入り込めるものが流行り始めています。それに似て、人間は、周りをCGで囲まれるように、言語で囲まれているのです。

問八

傍線部⑦とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 人間が言語によって生きるのは、ある環境のコードをヘッドセットで洗脳されているようなものである
- 2 人間は言語を通してしか現実に触れられないので、言語が異なれば見える映像や聴こえる音も異なる
- 3 映像や音だけでなく言葉の世界もまたコンピュータによって作り出され、VRとして体験できる
- 4 言語を通さない真の世界を生きるには、まずもって言語がVRであることを認識する必要がある

言語によって構築された現実とは、異なる環境ごとに別々に存在する。言語を通していない「真の現実」など、誰も生きていない。

いま生きている現実とはすべてコンピュータによって見せられていたVRだった、という映画の『マトリックス』みたいな話です。

環境においてノっているというのは、言語的なVRを生きているように見えても、実際には別の環境にいるという話である。

〔中略〕

⑧ある環境、すなわち言語的なVRが、人を支配もすれば、解放もする。

いわば、言葉は人間のリモコンである。

ある環境において、言葉は私たちに命令する。他の環境から見たら一線を越えたヤバイ行為を命令することもあるし、過剰な禁止を強いることもある。言葉によって私たちは、特定のノリに従った動きをさせられる。

しかし——言葉にはまったく逆の機能もある。ふたたび、言語の他者性の話です。言語は自由なのです。先ほどそれは、言葉遊びの自由であると述べました。さらに説明します。言葉遊びの自由とは、言葉の組み合わせによって、目の前の現実(ある言語的なVR)とは別の、たくさんの可能性を考えられるということなのです。このことには、社会的な意義がある。

(千葉雅也『勉強の哲学』による。ただし本文の一部と見出しを省略した)

問九

傍線部⑧とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 言語はリモコンのように人間を操り、命令も禁止も自由自在である
- 2 言語的なくらにおいて、一見解放に見えることも実際は支配にすぎない
- 3 言語はくた的な支配である一方、それとは別の現実の可能性をも想像させる
- 4 支配もそこからの自由も、すべては言語によって構築された現実である

令和3年度 推薦入試解答と配点 [11月21日・22日実施分]

国 語「11/22」(法学部・経営学部・建築学部)

問題番号	〔一〕															〔二〕									〔三〕								
解答番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9
正 解	2	1	4	3	1	4	2	2	1	3	4	4	2	1	3	1	2	2	3	3	4	4	1	2	2	3	1	4	1	4	2	1	3
配 点	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	4	2	3	3	3	3	4	3	3	4	4	3	3	3	3	4	3	3	4	4

動画教材「ベリタスアカデミー」を受講してみたい方は
info@veritas.bz または info@v-a-l.jp までお問い合わせ下さい。

